

厳選! 至福の銘品 物語 | 2
音の五つ星 Five Star

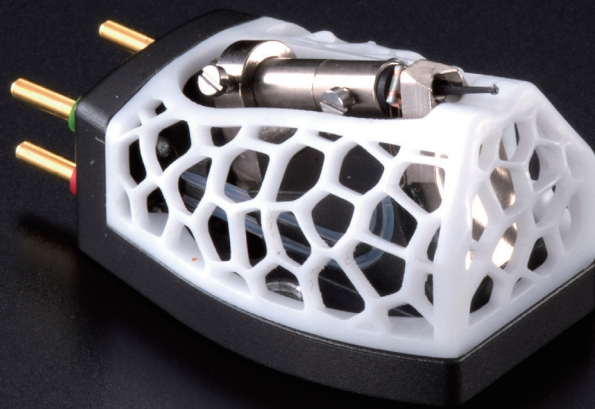
独自の技術と精緻な製品づくりで注目を集める新進ブランドのニューモデル

軽量かつ高剛性のボディ

X-quisite VORO

MCカートリッジ
¥1,078,000(税込)

Text by
小林 貢
Mitsugu Kobayashi
Photo by 田代法生



Profile

レコードをリニアにトレースするThalesトーンアームで世界のオーディオファンを驚かせたミツハ・フーバが、新ブランドX-quisite(エクスクワイジット)を設立しMCカートリッジを発表したのが2020年。Thalesトーンアーム同様、精緻な作りのカートリッジは、大きな話題を読んだ。VOROは、スケルトンのセラミック製ボディが特徴的なニューモデルである。上級機であるX-quisite CA同様、特許技術であるカンチレバーとコイルコアを一体成型したモノブロック・セラミックトランスデューサーを採用している。

Specifications

●コイル:4N銅線●スタイラス:Fritz Geiger S●磁気回路:ネオジウム・アールコ●ボディ:セラミック・アルミニウム●VTA:20度●質量:10.2g●針圧:1.9~2.1g●出力:0.7mV@5cm/s●コンプライアンス:12μm/mN●周波数特性:20Hz~30kHz●歪率:最大0.2%●インピーダンス:2×12Ω●推奨ロード・インピーダンス:100~200Ω

analog 40

初校

開発者から

From Developer



HiFiction AG
CEO
Michal Huber氏

私はカンチレバーとコイルの接合部が非常に重要であることを常に意識しています。接合部のないトランスデューサー(振動子)・ユニットの開発には長い年月がかかりました。この革新的な技術は、「X-quisite」ブランドの基礎となっています。

X-quisite CAに採用したアイアンレス・トランスデューサーは、強力なマグネット回路を必要とします。それは内部インピーダンスが高く(約20Ω)、出力電圧が低い(0.3mV)ため、このジェネレーターは、増幅に関してフォノステージにかなり厳しい要求があります。

ニューモデルのVOROは、あらゆる種類のMCフォノステージに完璧にマッチするよう、高効二層鉄芯構造の採用により高い出力効率を得ています。もちろんその性能は歪みのないクリアなものでなければならず、傑出したダイナミックさも備えていることが開発の条件でした。



出力ピンは金メッキが施されている。通常のヘッドシェルに取り付けた際にリード線が交差しないピン配置を採用している



スケルトン化されたセラミックボディは、高い剛性と空中伝播ノイズへの強さを持っている



上級モデルのX-quisite CA(¥1,320,000/税込)。アルミ・ブロックから削り出し加工で製作されたボディが採用されている

41 analog

セラミックで一体成型されたカンチレバーとコイルボディ X・quisiteは、トラックキング・エラーを僅少にするTHALESトーンアームを開発したミッハ・フーパが興した、フォノカートリッジ・ブランドだ。今回試聴の機会に恵まれたのは、最新モデルVOROだ。同ブランドの製品の特徴は、モノブロック・セラミック・テクノロジだ。これはカンチレバーとコイルボディを高強度セラミックで一体成型する、画期的な技術。この手法により動的負荷がかかるカンチレバーとコイルボディの接合部がなくなり、高い強度が確保される。そして音楽信号は針先からコイルボデ

イまでロスなく、正確かつ高い純度のまま伝搬される。基本的な構造は2020年に発売された同社処女作X・quisite CAから受け継いでいるが、細部で低価格化をする変更点が見られる。X・quisite トランスデューサーではアイアンレス・コイル設計であり、渦電流発生による電流損失を抑制できるメリットがあるが、非磁性体のコアは出力電圧が低くなるというデメリットがあった。本機では高効率二層鉄芯構造のモノブロック・セラミック・トランス・デューサーを採用することで、前作は出力電圧が0.3mVであったが、本機は0.7mVという高出力を実現している。

X・quisite CAと大きく変わったのは、セラミック製のボディを採用した点だ。ボディには数学者ケオルギー・ポロノイが作成した、ポロノイ図による幾何学的パターンが3D加工で彫刻されている。このパターンは自然界でよくみられる有機的なもので、これによりVOROのセミスケルトンボディを軽量化しながら高い剛性を確保すると同時に、共振を適切に排除している。コイルの線材はX・quisite CAと同じ高純度の4N銅線で、カンチレバーと一体化したセラミック製コイルボディに適合する技術を用いて、手作業で制作されているという。そして磁気回路には、前作と同じ強力なネオジウム・アークムが投入されてい

る。針先は前作がマイクロリッジ・ダイヤモンドであったのに対しVOROではFritz Geiger Sになっている。細部を明晰に再生できる高い解像度を実現

本機は聴感上で十分なフレンドリが確保され、帯域内に偏りがなくディスクに刻まれた音楽情報を正確にピックアップし、ハイスピードで発電コイルに伝える、という印象を受ける。そして音楽の細部を明晰に再生できる高い解像度を実現しているのは、独自のモノブロック・セラミック・テクノロジ故だろう。解像度の高いサウンドだが、それを強調するようなところがなく音楽を自然に再現するのも好感が持てる。フュージョン系ソフトの低いチューンのキックドラムのアタック音もスピーディに立ち上がり、微かな空気感も鮮明に再現された。また低域もボトムエントまでスムーズに伸びており、重量感を演出するような不自然さが無い。ダイレクト・ディスクや45回転盤などの情報量の多いソースでは、そのアドバンテージを正確にサウンドに反映させる実力を秘めている。エレキギターやヴォーカルなどは瑞々しく、メロディやソロが生き生きとしてくる。オーケストラの大音量部も破綻なく再生し、弱音部の高音弦楽器などは自然な艶が感じられる。高性能機にありがちなナーバスなところが無いのは完成度が高い証だろう。

初校